

はじめに

村山由佳

『愛の不時着』という韓流ドラマが大ヒットしたとき、あまのじゃくな私はなかなか観ようとしませんでした。尊敬する先輩作家や信頼する編集者たちがこぞってイイ、イイとすすめてくるので半ば仕方なしに観た結果、見事にハマってしまったのが、確か配信から1年後くらいだったでしょうか。

韓国の財閥令嬢がパラグライダーで飛行中に竜巻に遭い、山を越え軍事境界線を越えて北朝鮮へ不時着する。彼女を発見したのは二国間の非武装地帯を警備していた中隊長で、やがて二人は、結ばれることなど絶望的な恋へと身を投じてゆく……。もっと早く観なかつたことを後悔したくらい素晴らしいドラマでしたし、だからこそ世界的にヒットしたのでしょうかけれど、そのときふっと思いました。愛し合う二人の間を残酷に引き裂く38度線——あの「国境」が、実は第二次世界大戦で敗戦国となった日本のいわば身代わりのよう

な形で引かれたものだったことを、今ドラマに熱狂する視聴者のうちどれだけの人が知っているのだろうか、と。

かつて、朝鮮半島は日本の領土ということにされてきました。ですからあの戦争のときも、朝鮮の人たちは〈日本の〉兵隊として駆り出されて戦ったわけです。しかし結果として日本が負けたため、〈日本の領土である〉朝鮮半島には武装解除の名目で北からソ連が、南からアメリカが入り込み、38度線を境に二分割、それゆえ北は社会主義国家、南は自由主義国家となりました。歴史に「もし」はない、と言いますが、私はどうしてもその「もし」を考えずにはいられません。何か一つでも事情が違っていたなら、朝鮮半島ではなく日本の本土が、大阪か名古屋あたりで分断されていたかもしれないのです。このことについては対談でも踏み込んで触れています。いずれにせよ、それらの歴史的経緯を踏まえれば、日本で生まれ育った在日の人々に対して、私たち日本人が「イヤなら国へ帰れ」などと口にすることがどれだけ愚かであり的はずれであるか分かっていただけたらと思います。

数年前に私は、伊藤野枝のえの評伝小説『風よ あらしよ』を書きました。今から100年以上前に生まれた野枝は、あの時代にはあり得ないくらい自由に生きた女性でした。

正確に言うとは、自由に生きるために全力で闘い抜いた女性でした。

福岡の貧しい海辺の村に生まれ、学びたい一心で上京。親の決めた結婚を蹴飛ばして出奔、まず女学校の恩師だった辻潤つじじゆんとの間に二人の子を、続いて無政府主義者として有名な大杉栄さかえとの間に5人の子をなし、一方で平塚らいてうから雑誌『青鞥』せいとうを引き継ぎ、自身は婦人解放運動家として活躍したものの、大正12年9月、関東大震災後のどさくさ紛れに、憲兵大尉・甘粕正彦あまかすまさひこによって大杉とその幼い甥おいとともに虐殺されます。28年という短すぎる生涯でした。

大震災の直後、野枝や大杉と同じ無政府主義者・社会主義者たちが大勢検束され殺されたこと、それよりはるかにたくさんの方の5000人とも6000人とも言われる朝鮮人が市井の日本人の手で殺害されたこと、警察や政府が人々の暴動を止めるどころか煽あおつてさえたこと……。このあたりの背景についても対談の中でじっくり解きほぐしていきますが、それにつけてもつくづく嘆かわしいのは、100年前と今とを比べて、この国が正しい方向へ変わったようには見えないことです。

災害や事件が起こるたびに性懲りもなくデマが飛び交い、政府は過去から学ばず、人々はいがみ合い、特定の誰かを傷つけるヘイトスピーチまんえんが蔓延する。SNSが普及したせい

で、その規模拡大やスピードはもはや手がつけられないほどです。

さらに、多くの日本人は今やすっかり牙を抜かれ、国からどんな無理難題を押しつけられても諦めきつているように見えます。希望を持ってない世の中で自分を保つためには冷笑というポーズが一番楽なのでしょうが、何をして世界は変わらないとばかりに、安全圏からポチポチと文字を打つだけで相手をやり込めたつもりになって悦に入る……。伊藤野枝がよみがえって今のこの国を目にしたなら、地団駄を踏んで怒り狂うのではないでしょうか。

『風よ あらしよ』を書き上げてからというもの、世界はともかく、少なくとも私自身は大きく変わりました。おかしいと分かっていながら沈黙することを、卑怯だひきょうと思うようになりました。社会や政治と関わろうとすると煩わしさは増すけれど、そのぶん人生への愛いとしさも深まるものだとなりました。

女性というだけで生きづらい時代は、決して過去のものではありません。そしてそれはさまざまな立場にあるマイノリティにとっても同じです。現状を変えたいと願うなら、まずは自分が一歩を踏み出すこと——伊藤野枝という一人の女性の、短くも激しく濃密な生きざまは、私たちにその〈一歩〉の大切さを問い直してくれているように思います。

今回、私を対談相手に指名してくださった朴慶南パクキョンナムさんの著書『私たちは幸せになるために生まれてきた』の中に、お父さんの里帰りについて綴つづったエッセイがあります。

朝鮮半島が日本の占領下にあった頃、貧しくて食べていけなくなった一家はおじいさんを追いかけて日本へ渡り、まだ幼かったお父さんは口減らしのために奉公に出されるなどして成長します。戦後、やがて慶南さんが生まれ、おじいさんはすでに敗戦により分断されてしまった「北朝鮮」へ帰ろうとするのですが、長男であるお父さんは娘である慶南さんの将来を考えたのでしょうか、はじめて親に背きます。このとき、代わりに祖父について北朝鮮へ帰って行ったのが、お父さんのたった一人生き残った弟でした。だからお父さんはずっと、決して国籍を韓国に変えようとせず、贅ぜいたく沢もしなかった。自分が国籍を変えれば北朝鮮にいる弟家族がひどい目に遭うかもしれないし、彼らの暮らしを思うと日本にいる自分が贅沢をするわけにはいかない、と言い続けていたそうです。

ずっと後になって、ようやく墓参りのため慶南さんとともに祖国を訪ねることが叶かなったとき、お父さんは用意してきた飴玉あめだまを懐かしいふるさとの川へと投げ入れて、あまりの貧しさと飢えのため幼くして亡くなったかわいい弟たちを偲しのびました。厳しく恐ろしいばか

りの存在だったお父さんのその時の姿を、慶南さんはこんなふうに書いています。

「ごめんな。いまやっとヒヨン（注・お兄ちゃん）がおまえたちにアメをあげられる。こんなにも、ここに来るのが遅かったヒヨンをゆるしてくれ」（中略）

その弟たちへと、父の思いのたけが込められた赤や青、緑や黄色の色とりどりのアメが、きらめきながら川の底に沈んでいきました。

父は川岸にしゃがみこむと、声をふるわせながら泣いていました。背中からも怖さが伝わってくる父ですが、その後ろ姿は小さな少年のようでした。

この文章を読んだとき、私は我知らず嗚咽おえつをもらしていました。お父さんの言葉にならない後悔、嘆き、恨み、安堵あんど、そしてまたこみ上げる後悔……そうした感情の渦にこちらまで巻き込まれ、とても平静ではいられなかった。38度線の歴史を、意味を、その残酷さを、単なる知識としてではなく他人事でもなく、自分のこととして引き寄せて受け止めた瞬間でした。慶南さんによって綴られた、ごく個人的な、でも普遍的な〈物語〉を通して、ようやくその実感を身体からだに染み込ませることができたのです。

自分だったらどうだろう、どうするだろう……と、常に我が身に置き換えて想像してみること。そのうえで、お互いの文化や考え方の違いまでも含めて、理解し合おうと努めること。そうした想像力こそ、人間にとって最も大切なものなのではないでしょうか。物語や対話は、そのための手がかりの一つとして、在る。

慶南さんは古くからの友人ですが、一つの大きなテーマをめぐってこんなに深く長く対話したのははじめてのことでした。属する民族は違っても、同じ女性同士、いえ人間同士、言葉を尽くして分かり合えないことなどないはず。仕事の間隙を縫って幾度も顔を合わせ、お互いへの想像力を最大限に駆使して、時には涙したり、怒りに震えたり、あるいは希望に胸を熱くしたりしながら、あの大震災から100年経った今だからこそ考えるべきことを真摯に語り合いました。

まだまだ語り足りないところもありますが、これからその記録を目にしてくださいさるみなさんにも、すぐそばで聴いているように心を重ねていただけたらうれいす。もしかしたらこうだったかもしれない過去や、もしかするとこう在れるかもしれない未来について、思いを馳せるための一助になりますようにと、心から祈ります。